

CROSS

NBU 総合スポーツアカデミー

N-SPO SPECIAL

今注目の選手を一挙紹介

N-CUL

地域課題を解決する研究会を設立

Professor's ROOM

未来を担う医療プロフェッショナルを育成

2023年4月

「保健医療学部」開設！

NBU COLORS

27

2023
MARCH

特集

2022年度
卒業研究
論文合同発表会



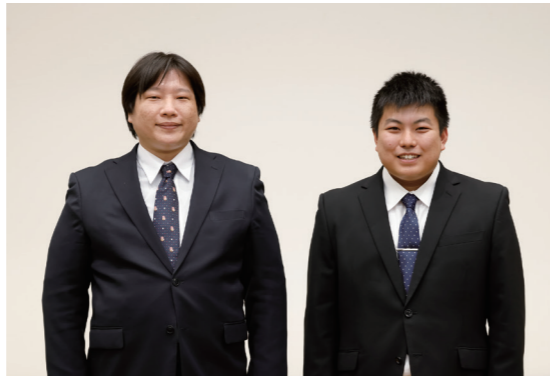
2022年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

機械電気工学科 若林研究室

内山 智己さん(山口県/県立光高校出身)

高効率なモータの研究・開発を行う若林研究室。内山智己さんは、電子機器に多く用いられる電磁銅板の磁区観察を試み、モータのさらなる高効率化と低損失化を目指した。

若林大輔准教授と内山さん。2022年12月の「電気学会マグネティクス研究会」では、奨励賞を受賞した。



電子機器の高効率化と低損失化のために必要な磁気特性評価。磁気光学センサを用いて磁区観察を実施し、磁性材料の特徴を調査した。今後さまざまな材料の磁区観察を行い、磁気特性の計測方法を再検討する。

テーマ
磁気工学センサを用いた
方向性電磁銅板の
磁区観察に関する研究

研究室で一番印象に残っているのはメンバー全員で臨んだ学会発表です。直前まで実験を行ったり、資料をまとめたり、一心不乱に取り組んできた研究成果を発表することができました。若林先生にも1年間さまざまなアドバイスをいただき、研究をやり遂げたことに大きな達成感を感じています。また今回、優秀賞を獲得でき、喜びもひとしおです。研究で苦労したのは実験に使うコントラストを変えた磁区画像処

理。これまで学ぶ機会がなかった「グレースケール」や「二値化」といった用語を調べることからスタートしました。難しい壁があつたからこそ、逆に学ぼうとする意欲につながり、コントラストを調節した画像を用い、求めていた実験結果を導き出すことができました。

大学卒業後は、東京で、電気工学分野を教える高校教員の道を歩みます。将来的には、自分が関わった生徒がNBUに進学して、自分の研究を引き継いでもらえたら何より幸せです。

高校教員として
学びを後押し

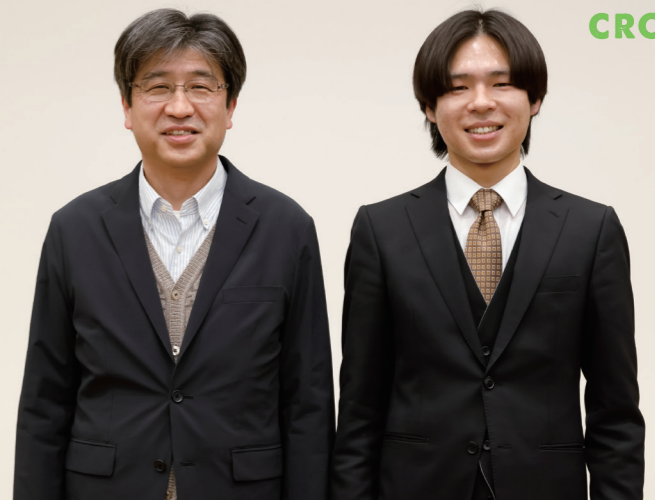
2022年度
卒業研究・論文合同発表会
最優秀賞

情報メディア学科

小島研究室

大塚 建さん(大分県/府内高校出身)

小島康史教授と大塚さん。大塚さんは卒業後はNHKの番組を担当する映像制作会社への就職が決まっている。



持ち続けたいのは
届けたい気持ちと
情熱と好奇心

2022年度の卒業研究・論文発表会で最優秀賞に輝いたのは、工学部情報メディア学科小島研究室の大塚建さん。数々の映像制作に携わってきた小島教授のもと、映画上映のプロセスについて研究し、ドキュメンタリー映像作品の一般公開を実現した。

小島 最優秀賞おめでとう。先輩たちが取り組んできた研究の集大成ともいえるプロジェクトだったので、今回の受賞をOBメンバーにも報告して喜びを分かち合いたいね。

大塚 皆で取り組んできた研究が評価されて嬉しいです。ゼミの仲間たちの協力や、先輩方の功績のおかげです。研究に関わってくれた方々とこの結果を共有したいと思います。

小島 一般公開に至るまで、コンセプトの設定やチラシ・パンフレットの制作など、たくさんハードルがあつた。しかし、何度も挑戦する君たちの熱意と意欲に感動したよ。努力を続ければ乗り越えていけることを体感できたと思う。

大塚 通常の映画が上映されるまでのプロセスや、どのような広報活動を行えば集客につながるかな、検証しながら研究を進めてきました。はじめは、ただ集客できるかが不安でしたが、結果的に3日間大入り満員という結果となりました。

小島 君たちのマインドが、活動の初めの頃は、「辛い」「キツイ」といった自分本位なものが大きかったけれど、次第に「人に喜ばれるものを届けたい」という他者本位の気持ちへ変化していったのを覚えている。だからこの結果がついてきたのではないかな。映像制作の基本は自らが発見したことや感動したことを他者と分かち合うこと。研究の中で、大塚くん自身の作家的な視点が醸成していったように感じているよ。

大塚 来場者や出演者の皆さんから多くの感想をいただきました。当初、映画の一般公開に反対

していた出演者からも、「当日映画館でお客さんの反応を見て協力してきてよかった」と言っていた。本音に嬉しかったです。パブリックな空間で映画を公開するということは、さまざまな人に影響を与えるということを実感できました。この喜びや達成感はやみつきになりそうです。

小島 ドキュメンタリーでもドラマでも「人」を描くことで、ストーリーが生まれる。人に興味を持ち、その重要となる場面を切り取り、発見や感動を届けるのが映像クリエイターの仕事。情熱と好奇心があれば道は開かれる。自分の感性を大切にこれからも歩んで欲しい。

大塚 先生の指導と、今回の研究で学んだことを活かして、卒業後は映像制作の道に進みます。いつか、今回ご協力いただいた「シネマ5」で、また自身が手がけたドキュメンタリー作品を上映することが目標です。

小島 大塚くんならきっと大丈夫。さらに成長した姿を楽しみにしているよ。

2022年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

建築学科 江越研究室

志方 遥郁さん(大分県/大分高校出身)

江越研究室で住空間の照明デザインについて取り組んだ志方遥郁さん。夜間の歩行時の不安感の低減を目標に、屋外の光の重心の高さと安心感の関係について研究した。

江越充助教と志方さん。「3年の研究室入室時から親身になっていただきました」と感謝を述べた。



郊外の街路では、防犯灯がまばらで薄暗く、夜間の歩行時に不安感を抱く街路が多く存在する。そこで、人々のそれぞれの生活が屋夜を通して、街路とつながり、水の波紋のように街に広がっていく、「波紋の寄り添い」をテーマにした住宅街を提案した。

テーマ
郊外の住宅地街路における
夜間の光環境改善に関する
研究及び提案

大学院進学後も
光環境の研究を

優秀賞を受賞することができて本当にうれしいです。江越先生には、アドバイスを指導はもちろん、当日の発表練習までサポートしていただきました。研究では光の輝度解析画像の撮影を行う必要があるのですが、シャッタースピードや絞りを替え、同じ写真を6枚撮影する際に、シャッターを切る直前で車の通行があったり、周囲が暗すぎてピントが合わなかったり、うまくいかないことが多々ありとても苦労しました。特に冬の屋外

今回の研究により、光の重心の精度検証のための被験者評価実験や、直接光源の処理方法、奥行き観点など課題点も多く見つかりました。卒業後は大学院に進学するので、引き続き研究に取り組みたいと考えています。

テーマ | 映画上映に関する実践研究

出演者に恩返しをしたいとの想いから、映像作品の一般公開を目指すプロジェクトがスタート。作品コンセプトの再設定、チラシやパンフレットの制作、メディアアプローチなどの広報活動を行い、大分市府内町「シネマ5」にて一般公開を実現。3日間とも満員を記録し、後日「別府ブルーバード劇場」でも上映会を実施した。今後も映画祭への参加や映画館での上映を目標に活動を続けていく。





今注目のスポーツ i-SPO

互いを認め合い
刺激し合って成長する

経営経済学部 経営経済学科4年

岡野 凜平

経営経済学部 経営経済学科4年

高 昇辰

Soccer

選手を拡大版で一挙に紹介！

SPECIAL

「好き」を追求し
大きな夢をつかむ

経営経済学部 経営経済学科4年

前田 純

Baseball



NBUサッカー部の岡野凜平さんと高昇辰さんが、2023シーズンよりJ3「ギラヴァンツ北九州」に加入することが決定した。

2人がサッカーを始めたのは幼少期から。きっかけはそれぞれ異なるが「サッカーは負けても得るものがある」と口を揃える。失敗したり、悔しい思いをしたりしながらも、力を合わせて目標を達成するというチームスポーツの魅力に惹かれて、これまでプレーを続けてきた。

「高選手は、ずば抜けた身体能力を持っている。チームメイトからすれば心強く、相手チームにとっては厄介な選手」と岡野さん。一方、高さんは「岡野選手は、高いサッカーIQとテクニックがある選手。自分の一歩先を行く選手で、常に刺激を受けている」と、選手としてお互いをリスペクトしている。経営経済学科の同じ研究室に所属し、一緒に卒業論文も取り組んだ2人は、サッカー以外でも共に切磋琢磨しながら走り続けてきた。

「NBUのサッカー部はグラウンドなどの設備や環境にとっても恵まれている。また、練習の強度も高く、約150名もの部員が競い合い、日々成長が実感できる場所」と2人。4年間のサッカー生活では、思い通りにいかないシーズンもあったが、2020年には九州大学サッカーリーグ優勝も果たし、部全体で高めあいながら、サッカーに熱中することができたことに心から感謝していると振り返った。

これから2人が加入するギラヴァンツ北九州は、若い選手

も活躍しているチーム。同学年の選手も多く、加入一年目でも試合に出るチャンスは少なくない。開幕スタメン出場を目標に、チームの勝利に貢献できる選手に成長したいという。「プロサッカーの世界では22歳は若いとは言えず、のんびりしている暇はない。夢を忘れずに、日々の練習にも励んでいきたい」と岡野さん。「プロは結果を求められる厳しい世界。今まで培ってきたものを全て発揮して、注目を集める存在になりたい」と高さん。

お互い高めあいながら走り抜けた大学の4年間。NBUサッカー部で得た経験を糧に、プロサッカー選手としての2人の人生が始動する。



おかの りんべい(長崎県/鎮西学院高校出身)V・ファーレン長崎U-18でのプレーを経てNBUサッカー部へ。ライン間でボールを受けるポジションに定評がある。得点やアシストなど決定的な仕事だけでなく、中盤の底から攻撃のリズムを作ることのできるマルチなMF。当たり負けしないフィジカルも持ち味。



こすんじん(京都府/京都朝鮮中高級学校出身)高い身体能力を生かした空中戦での強さと、DFライン裏への抜け出しが特長。闘志あふれるプレーが信条のFWで、ゴールへ向かう突進力も武器。90分間休まずに前線からプレッシャーをかけ続けるハードワーカーとして、守備面での貢献度も高い。

NBU硬式野球部で3年生の春からリーグ戦に出場し、以降4シーズン、26試合に登板した。秋からは3季続けてリーグ優勝を経験。また、大学野球の最後のリーグ戦ではベストナインにも選出。長身から投げ下ろす球威のあるストレートに、キレのある変化球を交えたピッチングが評価され、福岡ソフトバンクホークスから育成ドラフト10位で指名を受けた。

野球を始めたのは10歳の頃。野球をしていた兄の影響に加え、野球アニメにハマっていたことがきっかけだった。始めた当初はキャッチャーにあこがれていたが、左投げという強みを生かすことのできるピッチャーとファーストを任された。高校時代は全国的にも無名の存在だった。それどころか万年補欠で、メンバー入りしたことさえ一度もなかったという。「自分には才能がないのではと悩みましたが、野球が好きという強い想いで続けてきました。NBUから声をかけてもらい、大学でも野球が続けられたことに感謝しています」。

NBU硬式野球部は約250名が所属する厳しい環境。前田さんは3年生の春によくやくAチームに昇格した。元プロ野球選手であるピッチングコーチの指導を受けるようになったことで、さらなる成長ができた振り返る。「ピッチングの指導を本格的に受けるようになってから、改めて練習の意味を考えるようになりました。また、しっかりと考える習慣がついてから、成長率が上がったと感じています。大事な場面での登板ではこれまでの練習を思い出し、心の中で『大丈夫だ』と言い聞かせています」。

大学4年間の中で一番印象に残っているのは、4年生の春に出場した東京ドームでの「第71回全日本大学野球選手権大会」。プロの選手が使う、憧れのマウンドで投球することができた。テレビ放映で自分が投球している姿を見たときは大きな感動を覚えたという。リリーフピッチャーとして、勝負所で登板。初戦は好投、2試合目ではチームの敗戦につながる追加点を許したが、貴重な経験になった。

もともと憧れのチームだったソフトバンクホークス。まずはプロで通用する身体作りにも励むことからスタートし、支配下登録選手を目指す。2年目以降は、先発ローテーションの一角に食い込むことが目標だ。「選手層も厚く、ライバルは多いが、自分の頑張り次第だと思っている。最終的には大事な場面を任せられるピッチャーになりたい。そのためにも、ケガをしないよう自己管理を心がけ、しっかりと練習をして積み重ねていきたい」。

高校野球ではベンチプレーヤーだったが、最高峰のプロ野球の舞台へと第一歩を踏み出す。「諦めずに、好きなことを追い続けられれば、夢は叶う」。この言葉を後輩に残し、新たな挑戦が幕開ける。



まえだ じゅん(沖縄県/県立中部商業高校出身)身長187cmの長身サウスポー投手。オーバースローから投げ下ろす最速144キロの角度のあるストレートと、100キロ台の落差のあるカーブとの緩急がピッチングの持ち味。どんなピンチの場面でも、平常心でピッチングできることも評価された。



次世代のクリエイターはキミだ！

N-CUL

Local Design

工学部 建築学科3年

甲斐 胡桃

好きな自分で
あり続けるために

感謝の想いを胸に
新しい舞台へ挑む

経営経済学部 経営経済学科4年

井上 瑞樹

経営経済学部 経営経済学科4年

古庄 未久

Softball

N-SPO

今後の活躍が見逃せない！



2022年2月に「ろーかるでざいん研究会」を設立した甲斐さん。現在、研究会には建築学科、情報メディア学科、経営経済学科など学科の垣根を越えて30名以上が在籍。大学での学びを活かし、地域を盛り上げるため活動に取り組んでいる。授業で地域課題を解決するためのアイデアを模索するうちに、いつしか教室を飛び出し、実際に地域の人と交流するようになった。そして、協働で地域の課題解決に取り組める実践の場を増やしたいとの思いから研究会の立ち上げに至った。

活動のフィールドは少子高齢化が進んでいると言われている大分市佐賀関地域。地域交流イベント「楽・楽マルシェ」や、現地での意見交換会などに参画している。地元の不動産会社と一緒に取り組んだイベントでは、佐賀関での清掃活動で集めた流木などを活用したワークショップを開催。「佐賀関地域は、国道九四フェリーを利用して、四国から年間約54万もの人が訪れているが、素通りされてしまうことが多く、大分市中心部へと流れている現状を変えたい」と熱く語る。

当初は、メンバーたちに温度差があり、皆をまとめるのに苦戦したと振り返る。改めて「地域の課題を解決して、地域を盛り上げる」というビジョンを明確にしてからはチームの団結が深まったと感じている。目標にしているのは九州大学が取り組む「空き家プロジェクト」。空き家の改修を通じて地域との交流や、地域貢献を目指す。NBUではさらに発展させ、建築学科の学生が中心となり改修の提案や設計を行い、経営経済学科の学生が運営やビジネスモデルを構築。情報メディア学科の

学生がホームページやSNS、映像を利用した広報を行うなど、それぞれの学生が所属する学科の専門性を活かして取り組みたいと考えている。「最終的には、空き家を活用して学生のシェアハウスを作りたい。学生の家賃負担を抑え、オーナーは家賃収入を得て、地域の空き家問題を解決できる。学生と地域がWin-Winの関係を築き上げたい」と話す。

酪農を営んでいた両親の影響で、卒業後は北海道の酪農機器メーカーへの就職がすでに内定している。企画設計の仕事に携わりながら、一級建築士の取得を目指す。卒業してからも「ろーかるでざいん研究会」の活動にも遠隔で関わっていく、ゆくゆくは実家のある熊本県菊池市のまちづくりに携わるという夢を叶えたいと語る。

学生生活と就職活動を通して実感したのは、「できないのではなく、やらないだけ」ということ。「酪農と建築のどちらにも関わりたいかった。一步踏み出せば、意外とうまくいくことが多かった」と振り返った。残り1年の学生生活では、理想や想いを積極的に形にしていきたいと心に決めている。「周りの意見ばかりを気にする自分より、やりたいことをする自分であり続けたい」。



かいくるみ(熊本県/県立熊本工業高校出身)高校時代から建築を専攻。両親から「大学に行けば世界が広がる」と後押しされ、進学を決意。オープンキャンパスで訪れた際、両親のために考えた「働きやすい牛舎の設計アイデア」について、建築学科の教授と熱く語り合えたことがきっかけでNBUへ入学した。

NBU女子ソフトボール部のキャプテンを務める井上瑞樹さんと、副キャプテンの古庄未久さん。2人は来春から日本女子ソフトボールのトップリーグ「JD.LEAGUE」所属の実業団チームでプレーすることが決まった。

日本代表としてアジア大会に出場した経験を持つ古庄さんは、各国代表のチームプレーや技術を目の当たりにしたことで、NBUでの恵まれた環境をあらためて実感。さらに「部ではセーフティバントやスラップショットといった小技の技術も磨くことができた」という。井上さんも「技術面の向上はもちろんだが、礼儀や挨拶といったマナーを徹底して身につけられる点も特長だ」と語る。

お互いを「古庄選手は、身体能力の高さが特長。メンタルが強く、とにかく勝負強い」「井上選手は、とても負けず嫌い。二人でポジション争いをした時に、身に染みて感じた」と評する。

キャプテンとして1年間チームを牽引してきた井上さんは、「もともと人前で発言することが苦手で、リーダーになるタイプではなかった。キャプテンを経験したことは、これまでの人生の中で大切な経験になった」と、精神的にも成長する機会をくれた監督や仲間たちに感謝する。「40人を超える大所帯の先頭に立って、皆を引っ張る井上さんの姿がチームの大きな力になった」と、副キャプテンの古庄さんは断言する。

今後は実業団のチームでプレーする2人。井上さんは「大事な局面で結果を残せるよう、しっかり練習を続け、誰からも

応援される選手になりたい」と抱負を語る。古庄さんは「技術の向上はもちろんだが、ソフトボールは国際的にまだまだ発展途上のスポーツ。競技の普及活動にも貢献したい」と将来を見据えた。

「自分がレギュラーになれたのは3年生の時。“レギュラーとして試合に出場する”という目標を持って、練習に励んできた結果。コツコツと努力を続ければきっと報われる」と古庄さん。井上さんも「周囲の支えがあるからこそソフトボールがプレーできている。夢や目標に挑戦できる環境に感謝して、頑張ってほしい」と、後輩たちへエールを送る2人。4年間の想いや感謝を胸に、未来へ歩き出す。



いもうえ みずき(福岡県/福岡大学附属若葉高校出身)内野手・右投げ左打ち。NBUソフトボール部キャプテン。来春より「東海理化チアリーブロッサム」でプレー予定。強い責任感とキャプテンシーで、チームを統率。新人戦で敗退したチームを立て直し、全国大会出場にまで導いた。



ふるしょう みく(長崎県/九州文化学園高校出身)内野手・右投げ左打ち。NBUソフトボール部副キャプテン。来春より「タカギ北九州ウォーターウェーブ」でプレー予定。アジア女子大学ソフトボール選手権大会に、日本代表として出場。高い身体能力に加え、重要な局面での勝負強さでチームを牽引した。



時代が求める “医療産業人”を地域社会へ

2023年4月に開設した「保健医療学部」は、「保健医療学科」の1学科、「診療放射線学コース」、「臨床検査学コース」、「臨床工学コース」の3コースでの4年間の学びを通して、各国家資格の取得を目指します。さらに、工学部・経営経済学部とも連携を図り、幅広い知識と高度な技術を修得し、人間力と専門能力、職業能力を兼ね備えた“医療産業人”を育成します。

Chapter 1 医療の“今”に即応する人材を

保健医療学部では、1学科3コース体制で保健医療分野の重要性を学び、未来の医療を担う人材育成を目指します。放射線分野における最先端知識と技術を修得する「診療放射線学コース」は、診療放射線技師として幅広い分野で活躍する放射線の専門家や、人体の知識や医学検査の基礎や疾病を学ぶ「臨床検査学コース」は、臨床検査技師として地域医療に貢献する

分析・判断のプロフェッショナルを養成します。また、医学・工学の知識を身につける「臨床工学コース」は、臨床工学技士として医療機器の運用や開発設計に携わるスペシャリストを育成。昨今の医療現場では、専門職が連携するチーム医療の重要性が高まっています。専門性の違いを越え、他分野の知識と技術を共有しながら、多角的にアプローチする力を培います。



保健医療学部

保健医療学科

診療放射線学コース
【診療放射線技師養成】

臨床検査学コース
【臨床検査技師養成】

臨床工学コース
【臨床工学技士養成】



Chapter 2 成長するための“学び”と“経験”

医療を取り巻く環境が変化する今、専門知識の修得はもちろん、地域社会の一員としての自覚と責任が必要です。NBUでは、「成長」「発見」「実現」を軸にした3つの学びで、専門能力と人間力、職業能力を身につけます。また、高度な専門知識や技術を、

冷静かつ正確に発揮するためには、多くの経験を積む必要があります。臨床実習で実際の医療現場に触れ、さらなる知識とスキルを向上。講演会やセミナーに参加し、現場のプロフェッショナルのリアルな声から医療の最前線を体感。学部の垣根を越え、工

学部、経営経済学部との連携科目などフィールドを超えた学びや地域住民との交流によって、視野を広げるとともに幅広い分野に対応する力を体得。医療について多様な視点から学び、経験することで、真の“医療産業人”へ成長することができます。

医療系の道に進む家族の影響で 診療放射線技師の道を選択

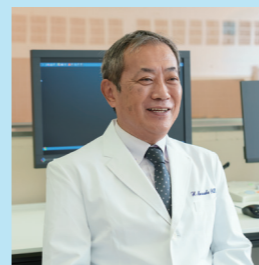
私は高校を卒業後、地元の山口県を離れ京都医療技術専門学校に進学しました。私が医療系を志した理由のひとつは、父が准看護師、兄が臨床検査技師だったことです。父はもともと左官業で、仕事中の事故をきっかけに転職しました。当時は医療資格もなく看護補助をしていましたが、56歳で看護学校を受験し58歳で准看護師の資格を取得。また、兄は高校卒業後、臨床検査技師の道に進みました。そんな父や兄の姿を見て、おのずと医療業界を目指すことを選択。医療機器に興味があったことから、診療放射線技師の世界に飛び込みました。専門学校卒業後、診療放射線技師として病院で30年ほど勤務し、管理職として新人を教育する立場になった頃、知識や理論をさらに学ぶ必要性を感じました。そこで、大学の社会人コースで1年間学び、さらに、41歳の時に働きながら大学院へ進学することを決意しました。

「学び」を通して変わった 現場でのものの見方や考え方

大学院での研究テーマは「MRI検査における体内金属のRF発熱」です。臨床現場では、人工関節などの金属を埋め込んだ患者さんがMRI検査を受けて痛みを訴えることがあります。これまで多くの技師が経験してきたにも関わらず、その原因は追究されていませんでした。実験を重ねることで、原因を解明。対策を講じることで臨床での検査の安全性の向上にもつながりました。大学院でのさまざまな学びを通して、これまで自分が経験したことや疑問に感じていたことには明確な理由があるのだと、納得できるようになったのです。保健医療学部の学生は、国家試験に向けて覚えなければいけないことは膨大です。しかし、それらの根拠となる「ものの理屈」が身体に浸透するようになるまで、とことん向き合っています。そのことは自分自身を成長させ、病気の発見や、安全性、将来の研究にも役立ちます。

医療の知識や技術だけでなく、 人間力が必要とされていく時代

医療現場での実習で、学生は、「最新の医療機器がある施設で働きたい」と言います。しかし、身体さまざまな臓器や血管、神経の構造を理解し、どう判断するのが効果的かを考えないまま、最新技術に依存してしまうと、仕事に対する誇りややりがいも持てません。患者さんが目の前にいるからこそ、私たちは、専門職としての技術を磨くことができるのです。いのちと向き合う緊張感や想像力、感謝が根底になければ、単なる作業になってしまいます。どれほど機器が高度になり、AIを積極的に活用しようとも、患者さんも、私たちも生身の人間であり、「理屈では通じないこともある」ということを決して忘れてはいけません。だからこそ、社会で求められる必要な人間力を、大学4年間で身に付けて卒業していただきたい。本学の保健医療学部が掲げる「医療産業人の育成」というビジョンに向け、学生とともに、新しい時代を切り拓いていける学びのカタチをつくっていきたくと思っています。



保健医療学部長
村中 博幸

山口県出身。京都医療技術専門学校卒業後、広島鉄道病院 中央放射線室、広島県立障害者リハビリテーションセンターなどで放射線技師として勤務。病院勤務の傍ら、広島国際大学大学院 総合人間科学研究科 博士課程を修了。2022年10月にNBUへ着任後、保健医療学部開設準備室長を経て、2023年4月より保健医療学部長。専門はMRI安全管理(体内金属のRF発熱)、脳機能画像(functional MRI)。

Professor's ROOM

#08

未来を担う 医療プロフェッショナルを 育てたい

2023年4月、NBUに開設した保健医療学部の学部長を務める村中博幸教授が、自身の経験になぞらえながら、大学で学ぶことの意義と、今という時代に医療の現場や社会に求められている人材の条件について語ります。



様々なフィールドで活躍する
NBU生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU COLORS



29

工学部 航空宇宙工学科4年
山口 琳花
(佐賀県/県立伊万里高校出身)

小さな頃からの夢に いざ、飛び立つとき

小学5年生の時にテレビドラマを観て憧れた航空業界。NBU航空宇宙工学科に入学してから、本物の機体に触れて、漠然とした憧れが「航空整備士になりたい」という決意へと変わった。所属する研究室では、トンボの翅を持つ凹凸の構造を応用した「羽ばたき翼」の研究に没頭。翼の揚力や機体の重量・重心位置、抗力を計算するなど、検証や実験を重ねていった。学生生活では「コロナ禍で、所属する航空部での活動がほとんどできなかったことが心残り」と振り返る。その一方で、「紙飛行機サークル」では大学4年間で学んだ専門の知識や技術を活用して、長時間の飛行できる紙飛行機の製作に励んだ。就職活動では、第一志望の「株式会社ソラシニア」の内定を獲得。この春からは羽田空港で勤務する予定だという。「まずは一人前の航空整備士になるために、国家資格の取得を目指し、今後も勉強に励みます。そして羽田空港でたくさんの経験を積んでから、九州の空港で航空整備士として活躍したい」と航空整備士への第一歩に胸を高鳴らせる。



【自慢の1カット】

「ものづくりセンター」の3Dプリンターでトンボの翅のパターンを生成した。これにポリプロピレンのシートを貼ると、翼が完成。駆動装置を使って羽ばたかせ、発生する推力を計測した。



30

工学部 機械電気工学科4年
原田 恒迪
(大分県/県立安心院高校出身)

“好き”を貫き通し、 新たな時代を切り開く

高校生の頃からやりたいことや進みたい分野が明確で、電気工学と機械工学の両方を学びたいという思いからNBU機械電気工学科へ入学した。その後、制御工学について学べる伊藤研究室に所属し、6本足の多脚式ロボットと、スマートホーム用のプラットフォームについて研究。6本足全てをワイヤレス接続で制御しようとする試みは、従来の有線方式に比べ大幅な重量軽減が期待されている。実現すれば、災害現場のレスキューロボットをはじめとする産業用ロボットの小型化、軽量化に貢献する可能性も。「まだ研究が進んでいない分野なので、参考資料や、ヒントとなる研究も少なく、開発は大変です」と苦労を語る。卒業後は北陸先端科学技術大学院に進学。これまで取り組んできた研究が継続できる点も決め手のひとつとなった。将来は博士号を取ることを目標に、海外でも研究をしたいという。「研究への熱量や楽しむ気持ちは持ち続けていきたい。モチベーションを高く、大好きな研究を続けていきたい」と新たなロボット開発に情熱を燃やす。



【自慢の1カット】

卒業研究で扱っている多脚式ロボット。スマートフォンで指示を出すと、自立できる段階まで研究が進んだ。「卒業するまでに、前後左右に動けるようにしたい」と研究を重ねる。



31

工学部 情報メディア学科4年
チェ ヨンジュ
(韓国/京畿道水原市出身)

目標を持ち続け 自己実現力を磨く

日本への留学を意識したのは高校1年生の頃。栃木県へのホームステイがきっかけだった。意気揚々と来日したが、当時は日本語がまったく話せなかった。翻訳機を使いながらのコミュニケーションにストレスを感じ、韓国に戻ると日本語の塾に通い始めた。昔からIT分野に興味があり、工学部のある大学への進学を希望していたこと、通っていた塾で紹介されたことからNBUの情報メディア学科に入学。その後、WEBデザインやWEBプランニングの授業を通して、その分野の面白さをあらためて実感し、IT企業への就職を決意した。大学生活では「韓国留学生会で開催した、留学生対象の就職説明会の成功が一番印象に残っている」と振り返る。卒業後は帰国し、就職することを予定していたが、日本で暮らしたいという想いから、4年生の8月末と遅めの時期に日本での就職活動をスタート。第一志望だったWEBサイト構築・運用を行う会社に内定が決まった。直近の目標は「卒業までに、友人とNBU生向けのポータルサイトを制作すること」。新たな目標にやる気は十分だ。



【自慢の1カット】

WEBサイト制作の1コマ。掲示板を設け、学生同士のコミュニケーションがとれる仕組みの構築に向けて、仲間たちと試行錯誤を重ねている。卒業後も、さまざまな経験を活かして、大きなプロジェクトにチャレンジしたいと意気込む。



32

経営経済学部 経営経済学科4年
服部 賢志朗
(宮崎県/県立延岡商業高校出身)

全力投球の大学生活を糧に 夢に向かっていざ出発!

NBU軟式野球部に所属し、4年次には実業団チームも参加する地元の大会で優勝するなど、部活動に全力を注いだ。「コロナ禍で、友だちとの交流が減ってしまいましたが、部活動では苦楽を共にする仲間たちと出会うことができました。就職活動で辛いときは、その仲間たちと支え合いながら、内定を獲得することができた」と4年間で振り返る。就職活動では、分野にとらわれず、「地域貢献ができ、地元で活躍する企業」で働きたいとの思いから、さまざまな企業に応募したという。「願い事」をラッピングした新幹線走らせ、地域活性プロジェクト「流れ星新幹線」に感銘を受けてエントリーした九州旅客鉄道(JR九州)から内定を得た。卒業論文でも、独自の列車デザインと沿線地域の歴史を楽しむ観光列車「Design&Story列車」の戦略をもとに経営について考察。JR九州の取り組みを調べるにつれ、就職へのモチベーションがますます高まった。勉強、部活、就職活動と、仲間たちと共に充実した大学生活を過ごした服部さん。4月から夢をカタチにしていくだろう。

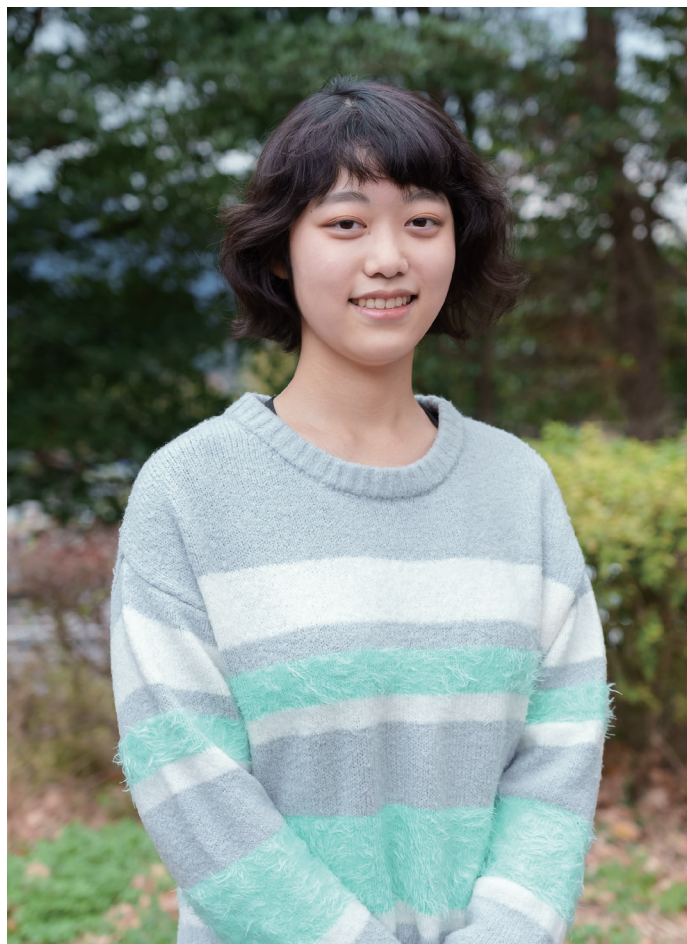


【自慢の1カット】

「エントリーシート丸暗記で臨んだ最初の面接で大失敗。慌てて進路開発センターへ。面接指導でその後の面接を乗り切れました」と就活を振り返る服部さん。パソコンの中には、膨大な就活資料が保存されている。

キラリ[☆]と

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くあなたを発見!



工学部 機械電気工学科 3年

中村 日向子

(宮崎県/日向学院高校出身)

小さい頃から手先を使った遊びが大好きだった中村さん。彼女のものづくりのルーツは幼少期に折り紙にはまったこと。その後、プラモデルやレジンアクセサリー、ロボット、WEBサイトと、ものづくりの楽しさに魅了され、少しずつスケールアップしていった。現在は、機械電気工学科でロボット関連の電子工学分野の研究に取り組んでいる。将来は、ドローンの開発を行う会社で働きたいと語る。小さい頃からの「好き」という気持ちを持ちつづけ、人に優しいものづくりのための大きな挑戦に目を輝かせている。

CROSS

NBU日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL 0120-097593

大学院工学研究科

工学部

経営経済学部

保健医療学部

□環境情報学専攻 □航空電子機械工学専攻

□航空宇宙工学科

□経営経済学科

□保健医療学科

□機械電気工学科 □建築学科 □情報メディア学科